

柔道普及に果たした雑誌メディアの役割

柔道関係雑誌群の内容分析(1898-1922)

スポーツ文化研究領域

5012A062-5 横井久美子

研究指導教員：志々田 文明 教授

柔道は世界に知られる武道種目である。その母体となる柔術は、武士の時代には外物、つまり主流ではないものとされていたが、廃刀令によって剣術が制限された明治期、嘉納治五郎(1860-1938)によって講道館柔道が創始されると、学校体育への採用や試合での活躍を背景に国内で普及・発展し、海外にも広がっていった。

嘉納はこの普及・発展にかかわって多くの講述をなし、文章を遺している。井上(1992；2004)によって指摘されるように、嘉納は講道館柔道全体を説明可能なものとして構成し、あらゆる機会をとらえて柔道を解説し、正当化し、勧奨する言論活動に従事し、また自前のメディアとして講道館雑誌を約40年間にわたって刊行し、柔道について倦まず弛まず語り続け、活発な言論活動などを通して、柔道を広く世間に認知させていった(井上，2004：pp46-48)。井上は嘉納を「言説の人」と表現するが、まさしく嘉納は、指導者であると同時に柔道の強力な「語り手」であった。

講述において嘉納の扱うテーマは多岐にわたり、その言論活動の主な場となったの

がこの雑誌群である。雑誌の刊行に先立って組織された各団体はいずれも、「柔道の文化的精神を発揚し、宣伝する」役割を担っており(嘉納, 1922：p.53)、その実務として必ず挙げられた雑誌図書刊行事業は、柔道の普及・発展にとって重要な位置付けであったと言えよう。

本研究においては、柔道普及に果たした雑誌メディアの役割について、明治・大正期の柔道関係雑誌群の分類を通じて歴史的な考察を行った。初期の雑誌群『国土』『柔道』『有効な活動』における誌面の変遷と、それによって起こった執筆者および記事内容・語り口の変化を対象として、3つの課題を設定し、それぞれ第1章、第2章、第3章で論じた。

第1章では、初期の雑誌群『国土』『柔道』『有効な活動』のページ数および価格の推移を明らかにし、その期待された役割を確認した。定価が設定されていない『国土』を除いた『柔道』『有効な活動』いずれも刊行期間のうち比較的早い時期に価格やページ数が変化していた。

発刊の趣旨に見られる個々の雑誌の役割は、『国土』『柔道』においては共通しており、青年修養誌として訓育を施す、というものであった。目的は共通していたが、誌面の様子は異なり、特に『柔道』において様々な切り口の記事が掲載されていたことが確認された。また、『柔道』刊行期間中に「柔道の専門機関誌」となることが示され、『有効乃活動』はそれを受け継いで同一内容の雑誌となった。

第2章では、特に『柔道』において行われた雑誌としての体裁の模索・安定と、記事内容・誌面構成・ページ数の変化と、執筆者の変化について明らかにした。

第3章では、雑誌『柔道』の誌面の変化をもたらした編集者・水谷竹紫に着目し、水谷自身の経歴および交友関係と『柔道』の執筆者の変化を関連付けて考察した。

水谷は学生時代を通じた多種多様なスポーツの経験と、それに連なる人脈を持ち、誌面の構成・編集だけでなく執筆者としても活躍し、『柔道』の誌面の変化やページ数の増加を数量的な面でも支え、新たな執筆者と、記事の語り口の多様性を齎した。

当初、指導者によって発刊され、啓蒙雑誌という性格が強かった講道館雑誌群は、社会的な地位や柔道の指導者という肩書きを持たない編集者を迎えることによって、様々な執筆者による意見の発信を可能にした。発表の場としての機能を強調して見せることで、読者を活性化し、書き手を育てたと考えられる。

『柔道』において見られた発信者から受信者への歩み寄りは、この両者の関係性が、多くの武道で見られる上下関係とは異なるということを示し、言論活動を自由に、また活発にしたと考えられる。

このような語り手の養成は、後に柔道が語られていく際の下支えとなったと考えられる。

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 ページ数遷移に見る初期雑誌群の役割の変化

1. 柔道はどのように定義されていたか
2. 『国土』『柔道』『有効乃活動』のページ数および価格の変化
3. 『国土』の誌面傾向
4. 『柔道』『有効乃活動』の誌面傾向

第2章 雑誌『柔道』の内容分析

1. 『柔道』『有効乃活動』の執筆者の傾向
2. 『柔道』の内容分析

第3章 雑誌『柔道』に見る編集者の重要性

1. 雑誌『柔道』の誌面変化のきっかけとなった編集者、水谷竹紫
2. 嘉納と水谷の関係性

第4章 結論

第5章 文献・資料